

# 万葉人の風と雲

葉 紅

## はじめに

『万葉集』の「風雲」を古くから詩語と認識し漢籍語の影響を受けたもの<sup>1</sup>として論じられてきた。確かに所出の3例は、山上憶良(8-1521七夕歌)、大伴池主(18-4128書簡)、大伴家持(19-4214挽歌)という三歌人の作であることから妥当な見解と思われる。一方『万葉集総索引 単語編』に「風雲」を項目として挙げていない。『時代別国語大辞典』(上代編)を確認すると、「風や雲。または風に吹き流される雲。消息を伝える使者に見立てる」になっている。

中国の文献に見られる風と雲の用例として、屈原の作とされる『楚辞』を挙げることができる。「九章」の「思美人」に「…言を浮雲に寄せんと願へば、豊隆に遇へども將はず。歸鳥に因りて辞を致さんとすれば、羌迅く高くして當り難し。…」という一節がある。雲に言伝を願うが、「雲豊」(神名)が聞き入れてくれないという。雲に消息を伝える使命を負わせる発想がこの時代からあったことを示している。しかし、『楚辞』が記紀歌謡の時代及び万葉人に読まれた確かな証拠がまだない。

時代がくだって大陸からの文化が入り、中でも六朝の詩文集『文選』が渡来し読まれるようになる。晋の陸士衡の作「擬古詩」12首の中に「行き行き重ねて行き行きに擬す」と題した1首目に「…遊子は天末に眇なり、還期をば尋ぬ可からず。驚颯は信を反す褰ち、歸雲には音を寄せ難し。佇立して萬里を思へば、沈憂は我が心に萃る…」があり、妻が遠く旅にある夫との音信を風や雲にも託せず、ただ佇んで夫を思うばかりの気持ちを詠んでいる。「驚颯」と「歸雲」がそろって音信を伝える表現に用いられた例である。陸士衡の「馮文龍

が斥丘の令に遷るに贈る」を題に持つ詩に「…慶雲は質を扶け、清風は景を承く。我人を懐うて、その邁くこと惟れ永し…」を詠い、他の地へ赴任していく馮文龍に惜別の詩を送っている。「慶雲」と「清風」には出立にあたり、幸先のよいことを願う詩人の心が表れた形になっている。

さらに同じく晋の左太沖の三都賦の一つに「吳都賦」があり、「…珍怪麗きて、奇隙充つ。徑路絶えて、風雲通ず。洪桃屈盤り、丹桂灌叢る。…」というくだりがある。「徑路絶、風雲通」というあたりを踏まえ、先に挙げた『万葉集』の3例の原型をここから見つけ出そうとしてきた。しかし、文字の姿形こそ認められるものの、「吳都賦」は土地の風俗、山川、城邑をうたいあげた土地褒めが主たる内容で、およそ音信を伝える発想自体は持っていないものである。

万葉時代の風雲ははたしてどんな意味合いで読まれ、何を内含していたかを「風や雲。または風に吹き流されて流れる雲」という原点に立ち返って見直してみる。

## 1 記紀歌謡・風土記の風、雲

『古事記』上巻によく知られている歌が載っている。

八雲立つ 出雲八重垣 妻籠みに 八重垣作る  
其の八重垣を (1)

「八雲」の「八」はやであり、「彌」と同根で無限を表し、「八雲立つ」は盛んに雲が立ち上る意であり、出雲にかかる枕詞になっている。須佐之男命が須賀で宮を建てるにあたり、「雲が立ち騰った」ことを吉兆とし、須賀は宮を建立するにふさわし

い土地であると褒めたたえた。

さらに『古事記』中巻神武記に次の2首が載っている。

狭井川よ 雲立ち渡り 畝火山 木の葉さやぎぬ  
風吹かむとす (20)

畝火山 昼は雲とみ 夕されば 風吹かむとそ  
木の葉さやげる (21)

神武天皇の死後、皇后のイスケヨリヒメと婚姻関係を結んだ神武の異母兄タギシミミが神武との間の子の命を狙った時イスケヨリヒメが急を知らせようと詠んだ歌である。雲がもくもくと湧き上がり、木の葉を動かす風が吹かれていることを反乱が起きようとしていることを暗に知らせた。山、川、風、雲、木の葉など目に映る自然界にあるものを詠み、謀反を叙景に託した比喻の歌である。本来風そのものは目に見えず、姿を捉えることが難しいが、木の葉を動かすことでその存在を明らかにしたことになる。

『日本書紀』では、伊勢の枕詞として「神風」が二度出ている。

神風の伊勢の海の 大石に や い這ひ廻る…  
(8)

神風の 伊勢の 伊勢の野の 栄枝を 五百経る懸きて… (78)

伊勢の国に吹く烈しい風は神威ある風であり、伊勢は神が風を吹かせる国だとしている。

さらに、書紀に斉明天皇が孫の建王の死を悲しんで詠んだ組歌が載っている。その最初の歌である。

今城なる 小山が上に 雲だにも 著くし立たば  
何か嘆かむ (116)

今城の小山の上に、せめて雲でもはつきりと立ってくれたならば、こんなにも嘆きはしないだろう、と言い、雲を死んでしまった思い出の人の霊の姿として見る観念に基づいたものと思われ、『万葉集』に類歌を見いだすことができる歌である。

現代に伝わる浦島太郎の昔話の原型として、『風土記』逸文で丹後國に

……女娘微笑對曰 風流之士 獨汎蒼海 不勝近談  
就風雲來 嶼子復問曰 風雲何處來 天上仙家之人也 請君勿疑……

という記述がある。忽然現れた美しい娘に浦島の子が「どこからやってきたのか」と訊ね、娘が「風雲とともにやってきました」と言い、「風雲はいつたいどこから来たのか」とさらに聞くと、「天上の仙家の者です。どうか疑わないでおくれ…」という内容である。娘が神女だと浦島の子が悟ったくだりである。風雲の彼方にある神仙郷に神女が住んでいて、この現世に風雲と共に飛来した。風雲は神仙郷とこの世の間を自由に行き来できるものとして捉えられていることが伺える。

浦島の子が海底（神仙郷）での甘美な日々を満喫した後、故郷に戻っても親兄弟はすでにおらず、長い歳月が経過したのを知り落胆してしまい、つい玉手箱を開けてしまうことになる。

「於是 嶼子忘前日期 忽開玉匣 即未瞻之間 芳蘭之體 率于風雲 翩飛蒼天……」昔日の若々しさは一瞬のうちに風雲と共に蒼空の彼方（神仙郷）に飛び去ってしまった。もう神女に会えないことに気づいた浦島の子は歌を詠んだ。

常世べに 雲たちわたる 水の江の 浦嶋の子が  
言持ちわたる

水の江の浦嶋子の神女への言葉を持ち運び伝える雲が神仙境の方に向かってたち渡っていると歌い、浦島の子と神女との歌のやりとりが続いた後、後世の人が浦島の子に成り代わって詠じた歌で逸

文が終わっている。

常世に 雲立ちわたる たゆまくも はつ  
かまどひし 我ぞ悲しき

神女を思う気持ちに弛みがあつて、わずかに心迷いして玉匣を開けた私、今は悲しい。「たゆまくも」とは天上と地上を通う雲の様子を描き、浦嶋の若さ（不老）を天上に持ち去った雲がたち渡っているという。

風や雲に神が宿っている考えが記紀歌謡と風土記に見受けられることが言える。人知の及ばない風と雲がたつところに神意のみ反映されるとし、時には崇め、また時には願いを託し嘆き悲しむ人間の姿がそこにあった。

## 2 『万葉集』の風

### 2.1 恋情の風

『万葉集』には恋を詠んだ歌に風はしばしば登場している。夫を待ち侘びる気持ちを表現したり、会えない恋人との接点にせめて風になつてもらえないかと願ったり、恋しているあの娘をよく見たいから、風よ、邪魔しないでおくれ、と一途で純粋な恋心を詠む歌には、風が効果的に詠み込まれている。

① 君待つとわが恋ひをればわが屋戸のすだれ  
動かし秋の風吹く (4-488)

才色兼備の女流歌人として名高い額田王の歌である。巻4と巻8に重出しているが、題詞に「近江天皇を思ひて作る歌」とある。天智天皇の寵愛を受け後宮に入ったものの、ただ待つ身となる寂しさを滲ませた一首である。すだれの音がして、待ち人の出現かと思いきや、風だったという。この1首と『玉台新詠』巻2にある張華の詩に共通項を見出し、六朝の閨怨詩の影響が指摘されてきた。

「清風動帷簾，晨月照幽房，佳人處遐遠，蘭室無容光……」

張華の情詩五首の三首目にある詩で『文選』にも収められているが、我が夫は遠方に居るので、この私のへやに姿が見えぬという。

さらに上記額田王の歌に対し唱和した歌がある。

② 風をだに恋ふるは羨し風をだに來むとし待た  
ば何か嘆かむ (4-489)

風だけでも恋しく思つておいでなのは羨ましい。せめて風だけでも来るだろうと待っているのなら、何の嘆くことがあろう、と。同じく天智天皇に愛された鏡の王女作である。現代なら恋敵の歌にも思われるが、二人は親昵な関係にあつて、鏡の王女は額田王の姉である説もあり、確証はない。額田王の「なんだ、風か」に対し、鏡の王女は「こちらには風さえ吹かないのだから」と返している。

③ 妹に恋ひ寝ねぬ朝に吹く風は妹にし触ればわ  
れさえにふれ (12-2858)

妹を思つて眠れなかった夜明けに吹く風よ、もし妹に触れてきたのなら、私にも触れておくれ。恋しく思っている妹に触れてきたであろう風、せめてその風に触れられれば、心が慰められ癒されるだろうか。そんな思いが詰まった一首である。離れている妹との空間を風が結んでくれる、そんな小道具の役目を風に負わせている。「思う人の身に触れた物を我が身に触れさせることは霊の交流のあること」と『万葉集評釈』<sup>2</sup>で評されている。柿本人麻呂歌集の歌で、心情を自然の事物を通して表現する寄物陳思の部立てに収められている。

④ わが挿せる柳の絲を吹き乱る風にか妹が梅の  
散るらむ (10-1856)

風に吹かれ乱れる若い柳の枝を見て恋人への思いを想起する歌である。いま目にした情景が心に

触れ、この風は妹の梅も吹き散らしているであろうと。柳も風も梅の花も登場するが、詠じている心は恋人への思いである。実景というより空想的な歌と思われる。

- ⑤ 大海の水底照らししづく玉齋ひて採らむ風な  
吹きそね (7-1319)

玉に寄す1317番歌から始まる一連の「玉に寄す」うちの一首で、玉は真珠であり、ここでは美女の喩えに使われている。男が恋した美女を何としても手に入れたい、「風な吹そね」と、風よ邪魔しないでくれというのである。ここでの「風」は親などの保護、監視を言い、真珠を取ろうとする自分を海人(男)に見立てた比喩の歌になる。

- ⑥ 佐保山を凡に見しかど今見れば山なつかしも  
風吹くなゆめ (7-1333)

「山に寄す」歌中の一首で、平凡な山に見ていたのだが、いまは近寄っていたい。風よ、決して佐保山を吹いてくれるな。「佐保山」を女に見立て、自分が近づくのを妨げるな、という。

上記すべての歌が恋絡みの題材ではあるが、風

は時には恋心の機微を表し(①と②)、時には官能的で空想をかき立ててくれたり(③と④)、また邪魔者扱いにもされたり(⑤と⑥)、その時々を詠む人の心に寄り添い、自在に、幾通りも変化し得る存在であったと言える。

## 2.2 想念の風

「風」という文字そのものが歌に登場してこない歌にも風に思いを託す歌が『万葉集』にあった。例として「凡」を挙げることができる。

甲骨文字では、「凡」は風をはらむ帆の象形とし、風を受ける帆の意味などを直接に表した象形文字である。風のあまねく吹き渡るところからすべて、おしなべて、の意味を表すようになった。同様に「凡」を傍に持つ「汎」という字も風のように広がり、あまねくゆきわたる意味を持っている。

万葉集の中で「凡」の字を歌中に用いられているのは全部で7首あり、他に左注に1例と序に1例それぞれある。下記一覧表にまとめてみた。明確にわかりやすくするために読み下しではなく、①～⑦までの和歌は万葉仮名表記にし、⑧～⑨の左注と序文は漢文をそのまま採用した。作者名は題詞及び左注の通りに表記した。

① 凡有者 左毛右毛將為夫 恐跡 振痛袖乎 忍而有香聞	6-965	娘子
② 大夫之 去跡云道會 凡可尔 念而行勿 大夫之伴	6-974	太上天皇
③ 凡尔 吾之念者 下服而 穢尔師衣乎 取而將者八方	7-1312	作者不詳歌
④ 佐穗山乎 於凡尔見之鹿跡 今見者 山夏香思母 風吹莫動	7-1333	作者不詳歌
⑤ 山代 泉小菅 凡浪 妹心 吾不念	11-2471	柿本人麻呂歌集
⑥ 凡 吾之念者 如是許 難御門乎 退出來米也	11-2568	作者不詳歌
⑦ 凡尔 吾之念者 人妻尔 有云妹尔 戀管有米也	12-2909	作者不詳歌
⑧ ~然依古記 便以次載 凡如此類 下皆放焉	9-1719 (左注)	春日葺首老
⑨ ~凡貿易本物 其罪不輕。~	18-4128 (序)	大伴池主

上記①の「凡有者」は「おぼならば」と訓み、「おぼろかに」と詠んでいるのは②の「凡可余」と③、⑦の「凡余」、④の「於凡余」、⑥の「凡」である。⑤の「凡浪」を「おしなみに」になっている。

改めて歌中で確認することにする。

① 凡ならばかもかも為むを恐みと振り痛き袖を忍びてあるかも (6-965)

凡有者 左毛右毛將為夫 恐跡 振痛袖乎 忍而有香聞

普通ならばこうしましょうに。恐れ多く、いつもなら激しく振る袖を堪えて振らずにおります。題詞に「大伴卿が太宰府から上京する際、娘の作る歌」となっている。「凡有者」は「普通」、「通常」という意味で解釈している。

② 大夫の行くとふ道そ**おぼろかに思ひて**行くな大夫の伴 (6-974)

大夫之 去跡云道會 凡可余 念而行勿 大夫之伴

「大丈夫がいくという道だ。おろそかに思っているな。大丈夫の人々よ」というのである。この歌には「右の御歌は、或いは曰はく、太上天皇の御製なりといへり」という左注がついて、前の973番の賜酒の歌の反歌になっていて、44代目元正天皇(680~748年)の歌ということになる。

天平4年(732年)秋、当時の大陸にならい、地方の軍政と防備を任務とする職を設け、節度使を派遣した。それに際し、聖武天皇(701~756年)が酒を賜る歌を詠んだのが973番歌である。当然この長歌と反歌の関係や整合性が議論される<sup>3)</sup>。が、本稿の目的は別なところにあるため、②の第1資料とする左注の「太上天皇の御製なり」通りで論を進めていくこととする。②番歌は天皇の歌であることを確認した上で、次の歌を見ていく。

③ **おぼろかに**われし**思はば**下に着て穢れにし衣を取りて着めやも (7-1312)

凡余 吾之念者 下服而 穢余師衣乎 取而將者 八方

いい加減に私が思うなら、下に着て汚れた服を取り出しては着ない(通り一遍に思っているなら、古びてしまったお前と親しみ交わすことはないのではないか)という。特別な気持ちを寄せてくれていると言われても素直に喜べない気分だが、万葉の時代に別の意味合いもあったかどうか、研究を待つのみである。古馴染みの内縁の女を妻に迎えようとする解釈もできる。この歌は比喻歌の「衣に寄す」部類に入っている作者不詳歌である。

④ (7-1333) 佐保山を凡に見しかど今見れば山なつかしも風吹くなゆめ

佐穂山乎 於凡余見之鹿跡 今見者 山夏香思母 風吹莫動

平凡に見ていた佐保山(女)を今改めてよく見てみるから、風よ、邪魔するな。前項恋情の風でも取り上げた一首である。

⑤ 山城の泉の小菅**おしなみに**妹が心をわが**思はなくに** (11-2471)

山代 泉小菅 凡浪 妹心 吾不念

山城泉の里の小菅が押し靡いているようにおしなみに(なみなみに)は妹の気持ちを思っていない。柿本人麻呂歌集にある「寄物陳思」歌である。

⑥ **おぼろかに**われし**思はば**斯くばかり難き御門を退り出めやも (11-2568)

凡 吾之念者 如是許 難御門乎 退出來米也母

なおざりに思っているなら、これほど出入りが厳重な宮廷からの退出を私がするものか。ひそかに禁門を抜け出し、女に逢いにきた男の歌とされ、作者不詳歌である。

⑦ おぼろかにわれし思はば人妻にありといふ妹  
に戀ひつつあらめや (12-2909)

凡尔 吾之念者 人妻尔 有云妹尔 戀管有米也

いい加減に私が思うならば、人妻であるというあなたに恋していようや。いや、していません。「なみなみに」と取る説もあり、議論されるところだが、自分の思い方の表現とし、「おぼろかに」とした。⑥と同じく作者不詳歌で「正述心緒」の部立てにある歌である。

表中の⑧と⑨は左注と序につき、万葉仮名ではなく、漢文になっており、「すべて」、「およそ」の意に解釈がつくので、ここでは割愛する。

上記②, ③, ⑤, ⑥, ⑦は万葉仮名を太字表記にしたところで示した通り、「凡」が「念」すなわち、「思う」という語と揃って登場する形になっている。前述通り、「凡」は風が帆にいっぱい受けての象形からの文字であり、いっぱい、沢山の意味から転じて、「すべて、あまねく行き渡る」になり、現在の漢字が持つ「およそ」、「すべて」に定着したと思われる。そう仮定できた時に、甲骨文時代からの「凡」の当初の意味合いに万葉人が風に思いをのせる定型があったのではないかと推測したくなる。また②の天皇の歌と③の人麻呂歌集歌のほか、⑤, ⑥, ⑦は作者不詳歌であることも興味深い。高貴な身分の天皇の歌と、歌集として現存しないが、人麻呂歌集に見出される歌なら、漢字の素養に関しては無論うなずける。詠み人知らずの歌もあることはすなわち異なる層に、「凡」と「念」を定型のように詠み、作歌が行われたことを想像できる。全7首中5首にその用字の傾向があることも見逃してはならない。また、士気を鼓舞する②の賜酒歌以外、すべて男女の仲に関わりのある歌であることも注目に値すると言える。

一言付け加えると、「おぼろかに」に「凡」を用いず、万葉仮名の一字一音の表音文字で「於保呂可尔」(8-1456)、「於保呂可尔」(19-4164)、「於煩呂加尔」(20-4465)に表記した3首は共に万葉時代の後半の歌になり、藤原朝臣廣嗣1首と大伴家

持2首である。

### 3 『万葉集』の雲

#### 3.1 偲ぶ媒介としての雲

隠口の泊瀬の山の山の際にいさよふ雲は妹にかもあらむ (3-428 柿本人麻呂)

雲に亡き者を偲び、「土形娘子を泊瀬の山に焼きはぶる時柿本朝臣人麻呂の作れる歌」と題詞で記している。泊瀬の山のあたりに去りにもやらずにいる雲は妹であろうか。雲を火葬の煙に見立て、「いさよふ」で死者の霊がたゆたっていることを言い、生者がもう会えない人への思いを雲に寄せるのである。

…朝庭に 出で立ち平し 夕庭に 踏み平げず  
佐保のうちの 里を行き過ぎ あしひきの 山  
の木末に 白雲の 立ち棚引くと 吾に告げつる  
佐保山に火葬せり。… (17-3957)

真幸くと言ひてしものを白雲に立ち棚引くと聞  
けば悲しも (17-3958)

無事であれと言ったのに、白雲となって立ちたなびいたと聞くと悲しいことよ。大伴家持の「長逝せる弟を哀傷しぶる歌」の長歌の末尾の部分とその一首目の短歌である。若くして没した弟書持を悲しみ悼み、詠出した歌であるが、「白雲に立ち棚引くと」は白雲になってたなびいている。火葬の煙をいう。日本では火葬が早くに始まり、古く持統天皇が火葬だったことが知られている。

留まりにし人を思ふに蜻蛉野に居る白雲の止む  
時も無し (12-3179)

家に残った人を思うと、蜻蛉野にかかる白い雲の消える時がないように私の思いも止むことはない。雲が途絶えることなく沸き起こるものとし、またそうであってほしいと願う羈旅に思を発す歌

である。

吾が面の忘れむ時は國はふり嶺に立つ雲を見つ  
つ偲ばせ (14-3515)

旅立つ夫に対しての妻の歌である。離れ離れになれば会える保証がない古代に今生の別れにもなりかねない思いもあったでしょう。もし私の顔を思い出せなくなったら、この國に湧き上がって嶺に立つ雲を眺め、私を懐かしく思ってください。せめて故郷に湧き上がる雲を媒介に故郷にいる自分を思ってくれればというのである。

死者を偲び、もしくは離れていて会うことが叶わぬ生者を懐かしく思う媒介として雲が歌われた。火葬の煙に見立てた歌は雲の他にも霧や霞など見出すことができる。千差万別に変化する気象について現代のように科学的な理解がなかった上、雲など特に神が宿る対象にもなっていたので、雲に聖なるものを感じられていたと思われる。そこに愛する人を失った悲しい気持ちを託すことで、自らを慰められたのではないだろうか。

### 3.2 使者としての雲

国遠み思ひな詫びそ風の共雲の行くなす言は通  
はむ (12-3178)

「羈旅に思を発す」部立にあるいわゆる羈旅歌で作者不明である。旅にあつて国が恋しく思いましょう。あれこれ考えて力を落とすな。風に連れて雲が流れていくように便りを差し上げますから。風と共に流れる雲に言伝をする発想が庶民にあつたと思われる歌である。

み空行く雲も使と人はいへど家裏遣らむたづき  
知らずも (20-4410)

空に行く雲も使いだと人は言うけれど、家に土産をやる送りようも分からない。「雲も使と」がはっきり取り込まれ、大伴家持の防人を見送る歌で

ある。

伝達方法も運送手段も発達していなかった古代人の素朴な思いと大胆な発想に改めて人類の進化に思いを馳せてしまうが、雲が言伝を伝え、土産を運んでくれる存在であってほしい、そうであればいいのだが、の思いがひしひしと伝わってくる。

### 終わりに

風、雲に限らず記紀歌謡、万葉の時代の天象、気象を詠い上げた歌をまとめて検証する研究が近年盛んに行われてきた。ことに恩師戸谷高明先生の『万葉景物論』と『古代文学の天と日-その思想と表現-』に詳しい。シリーズ刊行中の『天空の文学史 雲・雪・風・雨』<sup>4</sup>などもさらに深く掘り下げている。やり尽くした感さえある。そんな中で、本稿の意図するところは、「風雲」のようにすでに大陸の詩語の影響であると思われる言葉、発想を敢えて個々に分けて考え、日本だけの、『万葉集』ならでは何かを見つけようとした。風、雲に思いをのせる感情の発露は万葉人には特別なことではなく、日常的で身近なことであった。特に同時代ではまだ大陸で類を見ない白雲から火葬の煙-死者を想起する想念が生者の心を癒し、慰めたであろう。風を帆にいっぱい受けた象形文字「凡」の使い方にも万葉人独自の感性が感じられると言えよう。

注

---

<sup>1</sup> 『上代日本文学与中国文学 中』 小島憲之 塙書房

『万葉景物論』、『古代文学の天と日-その思想と表現-』 戸谷高明 新典社

<sup>2</sup> 窪田空穂 角川書店

<sup>3</sup> 「賜酒の歌」身崎壽『万葉集を学ぶ』第4集 有斐閣選書

<sup>4</sup> 『天空の文学史 雲・雪・風・雨』 松田浩 三弥井書店

テキストは下記書籍を利用した。

『時代別国語大辞典 上代編』三省堂

『万葉集総索引 単語編』正宗敦夫 平凡社

『万葉集』、『古事記』、『日本書紀』、『風土記』日本古典文学大系 岩波書店

『万葉集全注』 有斐閣

『万葉集全講』武田祐吉 明治書院

『万葉集注釈』澤瀉久孝 中央公論社